

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：43907

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04334

研究課題名(和文) 終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究

研究課題名(英文) A study on the early childhood education and care before and after the end of 2nd World War

研究代表者

清原 みさ子 (Kiyohara, Misako)

愛知学泉短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：00090366

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 幼児教育・保育の現場が、敗戦をどのように受け止め、戦後の歩みを始めたのかを  
実証的に明らかにするために、戦前に設立され現存する幼稚園・保育所を対象に、資料の有無を尋ねるアンケ  
ート調査を行い、125か所の資料を入手した(108か所は直接訪問)。保育日誌・園日誌等の記録を中心に、各園の  
記念誌や写真・アルバムを分析した。

昭和15年前後でも、「勅語奉読」や「宮城遥拝」が儀式のときに行われていたが、19年になると、「天皇陛下  
万歳三唱」も見られ、運動会は「体錬会」になったところもあった。戦争関連の題は、唱歌や遊戯で多く見られ  
た。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to make clear the change of early childhood  
education and care before and after the end of 2nd World War. We sent the questionnaire to the  
kindergartens and nurseries, which were established before World War. We gathered many materials  
from 125 kindergartens and nurseries, for example, the diaries, photographies, memorial books and  
so on. From the analysis of these materials, the following point became clear: As chief events of  
the year, the excursion, athletic meet and "Yugikai" -meeting of song and play, were held before  
and after World War. Only before World War kindergarten teacher recited the "Kyoiku-chokugo"  
-Emperor's educational article and infant from 3 to 5 years old, heard this recitation quietly. From  
far away teacher and infant worshipped the direction of Emperor palace in various ceremony. Towards  
the end of World War, they gave three choers for His Majesty the Emperor. Children's songs and  
games related to war often practiced.

研究分野：教育学

キーワード： 幼児教育・保育史 終戦前後 保育内容

### 1. 研究開始当初の背景

近年、幼児教育・保育の歴史研究は進んできてはいるものの、終戦前後の保育に関する研究は、まだ不十分である。特に、戦前・戦後を比較した研究や、敗戦前後に焦点を当てた研究はほとんどなされていない。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児教育・保育の現場が、敗戦・終戦をどのように受け止め、戦後保育の第一歩を踏み出したのかを、実証的に明らかにすることである。小学校が1941年に国民学校となり、戦時教育体制になる中で、義務教育ではなかった幼稚園、保育所(託児所)は、国民幼稚園という主張もなされるが、直接的な影響は少なかったと言われる。そうは言うものの、戦争関連の行事が行われ、宮城遥拝や神社参拝がなされていた。戦争関連の唱歌や遊戯、紙芝居やお話が保育に取り入れられていた。また、都市部では幼稚園の戦時保育所・託児所への転換や、空襲下での休園を余儀なくされていた。戦前に設立された園は、どの程度戦争の影響を受け、戦中にどのような幼児教育・保育をしていたのであろうか。戦中も保育を継続した園や、休園していても戦後いち早く再開した園は、戦争直後に、どのような幼児教育・保育を行ったのであろうか。敗戦により、それまでの状況が一変する中で、保育者達はどのような思いで子ども達に接したのであろうか。

敗戦とどう向き合い、幼児教育・保育を刷新したのか(しなかったのか)、その軌跡を実証的に明らかにすることは、戦後70年余りが経過した今、取り組まなければならない課題である。

### 3. 研究の方法

保育日誌・園日誌等の記録、保育案・指導計画等、園だより・お知らせ等、写真・アルバム、園の記念誌・あゆみ等、諸資料を発掘するため、昭和10年代、20年代の資料の有無を尋ねるアンケート調査を行った。調査対象となる幼稚園・保育所を探し出すことから始めた。

日本保育学会が1970年に行った調査で用いた『全国私立幼稚園名簿』を探したが、検索出来た図書館にはどこにも所蔵されていなかったため、出版元のフレーベル館に問い合わせをして探してもらったが、見つからなかった。それに代わる名簿類を探したが、設立年月日が記された全国的な名簿を見つけられなかった。保育所に関しては、全国の名簿があったものの、認可年月日として児童福祉法による認可が記されていて、それ以前に保育を行っていたかどうか不明で、使用できるものではなかった。そのため、幼稚園と保育所別に、県や市ごとに設立年を調べるという作業に多くの時間が必要であった。

この作業を進めながら、対象となる幼稚園・保育所に順次アンケートを送付し、資料

があるところを訪問して、資料収集に取り組んだ。アンケートの発送は、幼稚園786、保育所387で、合計1173カ所に上った。返信429、資料があったのは233カ所であった。

### 4. 研究成果

(1)平成28年3月から29年12月にかけて、北海道から鹿児島県までの108カ所の幼稚園・保育所を訪問した。この研究以前に資料を入手していたところと直接資料を郵送して下さったところを含めて、125カ所の資料が入手できた。

保育日誌・園日誌等の記録が残されていたのは、幼稚園29、保育所4(分園は本園に含める)であった。保育所はすべて私立であったが、幼稚園は国立2、公立14、私立13であった。これに加えて、園だよりや記念誌、各種書類や写真等、多数の資料を一堂に集めることができた。

(2)保育日誌・園日誌等の記録から、1940年から1948年を中心に、戦前戦後を比較して、保育の実際に関して以下のことが明らかになった。

行事に関しては、入園式、修了式、始業式、終業式、遠足、運動会、遊戯会などは、戦前戦後を通して行われていたが、その内容には違いがみられた。戦前には教育勅語奉読や宮城遥拝が行われたり、戦争に関連する歌や遊戯がとりあげられたりしていた。天長節、明治節、元旦拝賀式や、海軍記念日、陸軍記念日も行われていたが、戦後は多くの園で取りやめられる。仏教やキリスト教の園では、宗教関連の行事が行われていたが、クリスマスは1943年以降行えなかったところもある。

保育内容では、唱歌に戦争関連の曲が多く見られた。遊戯にもしばしば出てくる。戦後は、こうした歌はとりあげられなくなる。観察では、戦前戦後共通して、草花や身近な生物・小動物がとりあげられていた。談話では、多くの園で幼児向け昔話や童話、紙芝居、話し合いが行われ、キリスト教の園では聖話が多い点は戦前戦後に共通している。題目では、戦前では「教育勅語」「靖国神社」や「兵隊さんへの感謝」「防空演習の話」「日本の強い子」等戦争に関連したものが目立つ。また、天長節、明治節、紀元節等の行事関連の話も多くの園でなされていた。戦後になると、日本古来の武勇伝や戦争に関する内容は一部の園では残っていたが、全体的には姿を消している。新たに、子どもの話し方の指導などが入っている園もみられた。手技に関しては、戦前戦後ともに、「手工」「自由画」「たたみ紙」「ヌリエ」「はり紙」「切り紙」「折紙」等が行われ、その内容の多くは、季節、日常生活、年中行事に関連したものである。しかし、「軍艦」「兵隊さんの顔」など戦争に関連した題目が、戦前にはしばしば出てくる。戦中・戦後には物資不足の影響で、古葉書や家から持参した用紙を使っている。全体的に戦

後は手技に関する記述が減っている。

研究・研修に関しては、終戦前後に共通して多くの園で参加した講習は「遊戯」「音楽」であった。戦前にあった音感教育は戦後にはあまりみられなくなっている。また、公立園では、戦前戦後ともに県や市・区の研修会に出かけている。仏教の園ではその関連団体の研修会に、戦前戦後とも定期的に参加している。戦前には、他園見学という研修もなされていたが、戦後にはそういった記録が見当たらなかった。1944年には、研究・研修が少なくなっている。さらに、戦後になると、日誌の中に研究・研修そのものの記録が少なく、その内容も具体的に書かれていないので、何が共通していて、何が相違点なのかを確定することは難しかった。

保育者の思いに関しては、戦前戦後を通じて、記述が多い園とそうでない園とがあり、量的な面では全体的に少ない。1940年度の場合は、はしゃいだり、話しすぎるなど子どもの行動に「困った」気持ちや、保育が環境面で問題があり「困る」気持ちが表されている。出席が少ないのも「困った」という思いを持っている。逆に、保育がうまくいったり、子どもの成長ぶりがみられると「嬉しい」「楽しい」という記述がなされている。1944年の後半や1945年になると、「戦時下の子ども」「戦時下の保育」という切迫した状況での園児の安全に対する苦悩が表されていた。戦後には、安心して保育できる安堵感、子ども達が屈託のない園生活ができることの喜びを読み取ることができた。

空襲については、1940年に入ると「防空演習」が取り入れられ、10月以降はたびたび演習をしている。しかし、まだこの時期には危機感は少ない。1944年から45年前半にかけて、頻繁に空襲警報・警戒警報が発令される下での子どもの安全に対する危機感を抱いて日々を過ごしたことがわかる。休園せずに保育を続けている園でも、警報で保育を中断せざるを得ない状況にあった。

(3)各幼稚園・保育所が出している記念誌等から、卒園生の思い出をみると、遊んで楽しかったことや歌や遊戯、紙芝居、お弁当などに関するものが多く、けがをしたり、叱られたりしたこともあげられている。1944年以降の卒園生になると、戦争の影響が語られるようになるが、1945年には、食料をはじめとする物不足が記され、防空壕に逃げ込んだことや遠足や運動会がなかったことも記されている。戦後すぐには、食料や暖房がなかったことが思い出として出てくる。

保育者は、日常の保育に加え、慰問や防空演習のことを記している。1944年以降になると、物不足がひどくなり、糊にするため小麦粉を煮たり、焚き付けになるものを捨ったりしたことや、警報で防空壕に入ったり、園庭に畑を作ったりしたことが語られている。戦後すぐにはやはり物不足で、食料をはじめ入

手に苦労していた。子ども達の下駄の鼻緒のすげ替えも必要であった。

園舎が焼失したり、休園したりしていたところは、その再開に大変な苦労をしているが、戦争末期にも空襲を受けることなく園児も増加していたところもあるというように、地域によっても状況は異なっていた。

(4)保育日誌・園日誌等の記録及び記念誌等でとりあげた以外の幼稚園・保育所の写真から、以下のようなことがわかった。

行事で一番多い写真は、卒園・修了式関係であり、多くの園で集合写真を撮影している点は、戦前戦後に共通している。運動会や遊戯会も、戦前戦後に共通している行事である。運動会や遊戯会で、戦前には「兵隊さんありがとう」や「米英撃滅」の的当て等、戦争色のあるものもみられるが、「花咲爺」等の劇も行われていた。また、戦前の運動会では、オルガンを保育者が弾きながら行っていた写真がいくつかみられた。遠足は、戦前には写真があったが、戦後の写真がないので比較ができない。

国行事では、戦前には戦争に関連した諸行事の写真がたくさんみられたが、戦後はそういうものはなくなっている。戦後新たに出てきたのは、ユニセフ感謝祭でここにとりあげた以外の園でもこの写真が残っていたので、戦後は多くの園でユニセフ感謝祭が執り行われていたと思われる。

(5)全体を通しての考察として、日誌類を中心に記念誌や写真・アルバムからわかったこと含めて、戦前戦後を比較してみる。

まず行事に関して、入園式、卒園式、始業式、終業式等の行事は、戦前戦後とも行われていたが、戦前に行われていた宮城遙拝や国民儀礼、勅語奉読等は、戦後はなくなる。遠足や運動会、遊戯会は、戦前戦後とも行われていて、保護者や場合によっては地域の人も参加していた。卒園生で、遊戯会や運動会でしたことを覚えている人も多い。残されているプログラムや写真も合わせてみると、戦前には、遊戯会・学芸会で「兵隊さんありがとう」の遊戯や「海ゆかば」の合奏のように、戦争にかかわる内容もとりあげられている。戦前は小学校や町の運動会に参加して、「東郷大将」や「白衣の兵隊さん」の遊戯をするというように、戦争関連の内容も行われていた。玉入れや鈴割、だるま運びやリレーのような種目も、戦前からとりあげられていた。

戦前に多くの園で熱心に行われていた天長節、明治節、元旦拝賀式、紀元節は、戦後は行われなくなっていくが、1946・47年頃まで行っていたところもある。海軍記念日や陸軍記念日は、戦前に行われていた。特に小学校・国民学校の行事と一緒に参加していた国・公立幼稚園では、戦時色が濃かったようである。

仏教やキリスト教の園では、それぞれの宗教行事が行われていた。仏教では戦前戦後ともに、行事に違いはみられない。キリスト教では、園によって違いがみられた。戦争が激しくなる1943年以降クリスマスを行わなかった園と、1944年にも祝会をしていた園とがあった。1944年になっても感謝祭をした園もある。なぜそうなったのかに関する分析は課題として残された。

次に保育内容に関しては、当時の保育5項目と「自由遊び・その他」に分けてみていく。

「遊戯」に関しては、遊戯会の写真を見ると、幼稚園で1938年に「兵隊さんありがとう」の遊戯をしていたり、保育所で三国同盟の後、三国の旗を持って遊戯をしたりしていたことがわかる。『写真集 幼児保育百年の歩み』(ぎょうせい、1981、144、146頁)には、ナチスの旗を持ったり、旭日旗を持ったりした写真が紹介されているが、先の保育所では、同じ時に着物を着た女の子たちが踊っている写真も残されていて、戦中といえども戦時色一色ではなかったことがわかる。ただ、日誌に題が多く記されていた幼稚園で1940年度と1944年度を比較すると、1940年度には戦争関連の題は1割強であったのが、4割ほどを占めるようになっていて、戦争関連のものは増えていったと思われる。戦争関連の題が最も多くとりあげられていたのは「唱歌」である。「僕は軍人(大好きよ)」「軍艦」「水兵さん」「進めみくにの子供」「落葉の兵隊」「東郷元帥」「潜水艦」「鉄砲かついだ」等、複数の園でとりあげられていた。日本保育学会が1970年に行った戦争中の保育状況に関する調査結果が、『日本幼児保育史第五巻』に紹介されている(フレーベル館、1974、唱歌に関しては125~127頁参照)。

「戦時中によく唱われた歌」として、「僕は軍人大好きよ」「兵隊さんよありがとう」の2曲は特に多い。次いで「愛国行進曲」「お山の杉の子」「勝ってくるぞと」「隣組」「兵隊さん」になっている。「見よ東海の空あけて」や「予科練の歌(若鷲の歌)」もそれに続いている。この調査は1943年4月から1945年8月15日までに「最もよく歌ったものから順に三つその題名を列挙してください」というものなので、国家的な行事に関する歌は登場しない。その時期に重なる日誌の分析状況と比較してみると、多くの園で歌われていたのは「大詔奉戴日、天長節、君が代、軍艦、僕は軍人(大好きよ)」等であったので、「僕は軍人大好きよ」が共通であるほかは、異なっている。日誌等には記されていないが、記念誌にあった、子ども達が「大声で予科練の歌」を歌っていたという保育者の記述から、みんなで一斉に保育の中で歌うことはなくても、覚えた子ども達が歌っていたことがうかがえる。「園でよく歌っていた歌」というだけでは、保育者が伴奏をして皆で歌ったのか、子ども達が自由に遊びながら歌っていたのかはわからない。

「観察」に関しては、全体的に他の項目と比べて記述が少なかった。観察とは記述されていなくても、園外保育に出かけた途中や行った先で行われたこともあったと思われる。園児だった人の思い出で、どんぐりを拾ったり、タケノコを取ったりしたことが記されていたし、ウサギを囲んで見ている写真が残されていること等から、実際には日誌等に記載されたより多く取り入れられていたのではないと思われる。敗戦後は、観察を保育の中で設定することは少なかったが、外遊びが中心だったことや、土団子作り、草摘み、バッタとりをしたこと等が語られていて、遊びの中で自然にふれることは行われていたと思われる。

「談話」に関しては、多くの園で、幼児向けの童話・お話や紙芝居が行われ、経験発表や話し合いが行われている園もあった。紙芝居では「三匹の子豚」や「七匹の子山羊」「桃太郎」「小猿の恩返し」等、戦前戦後ともとりあげられていたものもあれば、「金太郎の落下傘部隊」や「爆撃荒鷲隊」「ソロモンの海戦」のように、戦前のみあげられている戦争関連のものもあった。キリスト教の園では「イエス伝」「ダビデ」のようなキリスト教関連のものは、戦前戦後ともとりあげられている。童話・お話では、「舌切雀」のような昔話は、戦前戦後ともとりあげられている。1944年には、幼児に向けた戦争に関する話や、靖国神社大祭や大詔奉戴日、天長節、明治節、紀元節、地久節をはじめ陸軍記念日や海軍記念日に関する話は、多くの園でとりあげられていたが、戦後間もない時期には、明治節や教育勅語の話は、一部の園で残っていた。

「手技」に関しては、全体的に戦前の方が記述が多く、戦後は減っている。「たたみ紙・折紙」「切紙」「貼紙」「塗り絵」「自由画」は、戦前戦後ともとりあげられ、その内容は季節や行事に関するものが多い。ただし戦前には「軍艦、Z旗、鎧かぶと」のような題目が出てくる。江戸川双葉幼稚園に多数保管されている幼児の絵をみると、戦後にも自由画で軍艦を描く子がいたことがわかる。戦争が終わったからといって、子どもの絵がすぐ変わるわけではなく、園でも禁止はしていなかったと推察される。1944年以降になると、物がなくなり、糊も小麦粉を煮て作っていた。戦後もすぐの頃は、やはり物不足が続いていて、戦前同等、古ハガキ等の廃物が使われていた。

「自由遊び」は、園によっては多種多様な遊びが記述されていた。滑り台、鉄棒、ブランコ、砂場のような遊具を用いた遊びは、戦前戦後共通である。ブランコや砂場、遊動円木に関することを思い出として記した卒園生も多い。幼稚園・保育所に行かなければ遊べない遊具は、楽しいものであったことがうかがわれる。鬼ごっこや汽車ごっこのようなごっこ遊びも、戦前戦後共通であるが、兵隊

ごっこや戦争ごっこのような遊びは、戦後はみられなくなる。日本保育学会で幼児が好きな遊びについて、「男児・女児別に三つずつ列挙してください」という調査をした結果が紹介されている(『日本幼児保育史 第五巻』フレール館、1974、110～112頁)。多い順に男子「戦争ごっこ」「砂場遊び」「兵隊さんごっこ」「陣取り」「鬼ごっこ」、女子「ままごと」「看護婦さんごっこ」「砂場遊び」「人形遊び」「鬼ごっこ、縄跳び(同数)」である。1944年度から敗戦までの日誌等では、「戦争ごっこ」は出てくるが、多くはなかった。看護婦さんごっこは見当たらなかった。

警報と保育状況に関しては、1943年のガダルカナル撤退、アッツ島玉砕、1944年の本土空襲が行われる中で、子ども達の安全を確保しながら、保育を続ける努力がなされていた。警報が出されると、すぐに帰宅させることが多かったが、頻繁に警報が発令されるようになると、状況を判断しながら保育を継続する園もでてくる。警報が出されなくても、用心のため帰宅させたという園もあった。

幼児教育・保育は、義務教育体制の枠外で、就園率の低さからいっても直接的に戦時教育体制に組み込まれることはなかった。『幼児の教育』誌上でも、国民幼稚園という言葉が用いられるが(第41巻第2号、日本幼稚園協会、1941、1頁ほか)、国民幼稚園は発足しなかった。しかし、今回の資料収集で、国民保育園に名称を変えたところがあることがわかった。長野県の飯山市のめぐみ保育園は1942年に「飯山国民保育園」と改称していたが、敗戦後すぐの9月に、「めぐみ保育園」に戻している。上田市の甘露園は、同じ年に「中央国民保育園」と改称し、1948年に「甘露園」と再改称している。長野県で変わっていたわけではなく、飯田市の慈光幼稚園は1944年に慈光保育園と名称を変更しているが、国民保育園にはなっていない。

戦中は、空襲で被災したところだけでなく、園舎を軍や工場等に接収され、転々としなければならない園もあれば、休園を決めた園もあり、保育の継続には苦勞が付きまっていた。園庭も防空壕や島になり、限られた環境での保育をせざるを得ないところもあった。

警戒警報、空襲警報が頻繁に出されるようになると、疎開する園児もでて、園児は登園しなくなる。園児を集めるのに苦勞する園もあったが、空襲もなく、園児が増えたところもある。東京や大阪から疎開してきた園児がいた園もあるというように、地域による違いが大きかった。

戦争が激しくなると、遺家族への支援も含めて、保育所への希望が増える。そうした中で、鹿児島県にある利永保育所のように、尋常高等小学校(国民学校)が経営主体であった農繁期託児所が、1944年に利永常設保育所になったところもある。

キリスト教の園では、園長が追放されたところもあれば、目立たないようにシスターが

平服を着用したところもある。1944年度の卒園写真に外国人のシスターと一緒に写っている園もある。

このように、戦争の影響は、まぬがれ得ないものの、戦中はこう、戦後はこうと言いきれない多様な状況があった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

豊田和子・清原みさ子・寺部直子・榊原菜々枝「終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究 幼稚園を中心に」、『名古屋芸術大学紀要』第39巻、査読無、2018年、pp.203-218

〔学会発表〕(計 2 件)

榊原菜々枝・清原みさ子・豊田和子・寺部直子「終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究(1) 幼稚園の事例から」、日本教育学会第75回大会、2016年、北海道大学

寺部直子・清原みさ子・豊田和子「終戦前後の幼児教育・保育に関する実証的研究(2) 続・幼稚園の事例から」、日本教育学会第76回大会、2017年、桜美林大学

〔図書〕(計 件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

清原 みさ子 (KIYOHARA Misako)

愛知学泉短期大学・教授

研究者番号：00090366

### (2) 研究分担者

豊田 和子 (TOYODA Kazuko)

名古屋芸術大学・人間発達学部・教授

研究者番号：80087915

寺部 直子 (TERABE Naoko)

愛知学泉短期大学・非常勤講師

研究者番号：20759592

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

榊原 菜々枝 (SAKAKIBARA Nanae)

名古屋文化学園保育専門学校・教員